

対馬歴史民俗資料館報

第 8 号
昭和60年 3 月

編集・発行
 長崎県立対馬歴史民俗資料館
 対馬市今屋敷 817
 郵便番号 09205-2-3687
 印刷所
 長崎県栄町 6-23
 昭和堂印刷
 電話 (0958) 21-1234

千金丹の版木

津江篤郎



この度、嵯原町大手橋のほとり茂村薬局から本館へ種々の資料の寄贈を受けた。種類は製薬用具や帳簿、道具類等多彩である。文政十一年の箱書きのある「いりやき鍋」（いりやきとは対馬郷土料理の代表格）等珍しいものが多い。

その中に、葉書大のものから葉書五枚位の大きさまでの二十数枚に及ぶ版木があった。明治始め頃から中期の制作であろうか。主に桜材で、風景や花模様、紋等の絵柄の外に、罫紙用のもの、薬の名前や屋号を記した袋用の版木類である。版は細かな技法の浅彫りで、凹部の浅えも凹鑿で丁寧な仕上げられている。色彩は黒、朱、藍の刷毛塗りのあとがあり、特に薬袋用と罫紙用は絵具がこびりついて残っているものもある。多色刷りのものは、例えば表には雁の渡る図があり、板の裏には月が彫ってあり、本格的な版画方式ではな

いが、巧みな器用さが感じられるものである。

大体、木版画は単純極まる印刷設備で事足り、輪転機などという大仕掛のものの進んでいない当時としては誰でも何処でも当り前のこととして作業にあたったのであった。

薬袋の版木には千金丹、寿福、ローマ字で LEMON SORUP というのもあり、唐草や竜の飾縁が如何にも時代を感じさせるものである。これ等の版木を笹の葉で包んだバレンで薬袋に刷ることは家庭を守る人達の大切な仕事であった。当時富山の反魂丹はもちろん（富山売薬資料館）、全国の薬袋はすべてこの方法で刷られ配られて親しまれたのであった。

さて、対馬で育った人はゆうまでもなく壮年以上の人は、ほろにがい金箔をはった「千金丹」という常備薬を懐しく想い起されることであろう。常に懐中すべきものであり、旅行者や、戦時中の召集兵への饒別等にも大いに利用されたものである。

越中富山の反魂丹、大和の奇応丸や肥前田代の万金膏などは全国に名声を響かせたが、対馬の千金丹もここにありという時代があった。ちなみに、田代は藩政時代の初めから対

馬藩の飛地であったため、対馬を媒介として朝鮮系統の薬種薬法が伝わり発展したという。

千金丹本舗は、管見の限りでは、明治の初め、厳原に茂村濟生堂、三山回生堂、高島銭屋があった。

千金丹の説明を手許にある厳原国分 三山幡次郎本家の効能書によりその概要を記すことにする。それは手漉きの和紙に黒一色で印刷されたものである。効能の大意は胸腹痛、食あたり、感冒、宿酔……等々、つまりこの靈丹は健胃開鬱順氣の良劑である。用法は湯水にて服用せよ、又、頭痛には一角を唾にて潤し痛む

処に貼るべしとある。この千金丹の起源は往昔朝鮮国の医哲の手により授けられたる名方であり、弊屋に於て経験発売すること久しく、今般更に内務省免許を受けたとある。本家調合所は厳原町国分であり、宝丹其他妙薬大取次所も兼ねている。支店は朝鮮釜山、東京、京都、大阪、福岡に夫々構えているとある。

茂村家のこの度の資料が整理されたところは、本店の真裏にあたり、小路を隔てて石垣に囲まれた家の倉庫であった。ここが以前千金丹製造工場のあった場所である。嘗て高島銭屋の土蔵の一棟が千金丹やタイホ

エンの製造場であったと古老の談にある通り、千金丹製造は家内作業的なものから出発している。高島は日露戦争当時は軍隊の町雑知に薬局支店を出し、ずっと千金丹を作り続けた。十代茂村源助氏は、厳原の小工場では需要に応じ切れなくなり、大阪に進出し、土地をもとめ工場を建てて薬製造に従事され、其の後益々規模も拡大され発展していったのである。時代は進み、第二次世界大戦

の空襲は大坂千金丹工場を焦土と化してしまった。惜しくも、それ以来製造中止となり今日に至っている。茂村薬局は藩政時代の開祖から現在十三代にも及ぶ、厳原では数少ない老舗である。店内に浮彫りの大きな「千金丹」の看板が掲げられており、その重厚な古色の輝きは辺りを圧して往時を偲ぶにふさわしい貫禄で迫ってくる。

伊能勘解由の対馬測量

長 郷 嘉 寿

偉大な測量家であった伊能勘解由が、幕命による全国測量の一環として、平戸藩領の宍州から対州府中(厳原町)に入船したのは、文化一〇(一八一三)年の春三月二十八日のことであつた。勘解由時に六九歳。

この日の藩庁日記には、「天文方御役人測量為御用被差越、今夕無異儀着岸有之、委細別録ニ記」とある。「宗家文庫」として当館に架蔵する記録類の中に、この時の関係記録が四冊みられるが、右の藩庁日記に

口の虎崎と野良崎に標幟を立てさせ、夜に入ったのでかがり火を焚き、折瀬には標船を差し立てていた。

これよりさき、遠見番所からの報告によつて、測量隊の乗船発見の知らせの合図として、貝吹き山伏の吹き立てる貝の音によつて、測量御用掛を命ぜられた人達は、麻上下に威儀を正して出迎えた。

西の浜に上陸した測量隊の一行は、三軒の指定旅宿に入つて旅装を解くが、宿舎にはそれぞれ幕を引き、提灯を立て、掛札(御宿看板)が掛けられ、附近の横丁には警備の仮番所が設けられた。

御用掛を命ぜられた郡奉行佐勝左衛門以下の人達は、宿舎に出頭して、かねて触達しのあつた諸書上げ調書類と、国絵図写及び東西御泊宿の子定表を提出し、翌日からの測量計画について説明し、隊長の同意を得た。なお、測量隊は到着第一夜のこの夜半にも、休む間もなく、近くの空地で星測り(天体観測)を実施している。

こうして、翌二九日から六〇日間の予定で、本格的な測量作業が始められるが、四月朔日までの三日間は、府中浦を中心とした海辺と市中の測量にあてられた。

偉大な測量家であった伊能勘解由が、幕命による全国測量の一環として、平戸藩領の宍州から対州府中(厳原町)に入船したのは、文化一〇(一八一三)年の春三月二十八日のことであつた。勘解由時に六九歳。この日の藩庁日記には、「天文方御役人測量為御用被差越、今夕無異儀着岸有之、委細別録ニ記」とある。「宗家文庫」として当館に架蔵する記録類の中に、この時の関係記録が四冊みられるが、右の藩庁日記に

四月朔日、隊長から測量隊の編成が示され、以後東西の二隊に分れて行動することになるが、東隊は府中から東海岸沿いに北上し、西隊は府中から東海岸を豆蔵まで南下し、更に西海岸を北進して両隊鰯浦で出会うこととし、その後は再び東西に別れて南下し、浅海湾を経て府中を指して測量を進めることが明らかにされた。これに応えて、藩でも既に任命済の測量御用掛を東西二組の「附廻組」に編成して、測量隊に対する協力支援態勢を整えた。隊員の氏名等は省略するが、東隊は伊能勘解由以下一〇名、同行する附廻組が郡佐役（測量中部奉行並）中村郷左衛門以下一九名（内医者一）、西隊が手伝勤方坂部貞兵衛以下九名、この附廻組が郡奉行佐治勝左衛門以下一五名で、測量本隊と合せて総勢五三名に達した。なお、この外に測量隊直属の通し夫（交代なしの人夫）と八郷からの人夫が動員提供されることになる。

こうして、五月一六日までの四七日間（内大雨による作業不能二日）で、予定期間を大幅に短縮するといふ他に例をみないハイスピードで全体の測量を終ったが、この驚異的な作業の進捗ぶりに、伊能隊長は再三に及んで藩の強力な支援と郷夫の協力に對して深い謝意を表明している。測量隊は、附中帰着の翌五月一七日には出帆する予定であったが、天候不順による風待ちの都合もあって、漸く五月二日出帆、五島宇久島に向った。藩差し廻しの送り船三艘の船団の指揮は、船奉行兼務を命ぜられた中村郷左衛門が執った。船団は勝本及び平戸田助経由で翌二三日夕刻宇久島（たいら港）に無事着船し、一行を五島藩へ引きついで。

こうして、伊能の測量隊は、対州滞在を五日、測量中は大変な苦勞を重ねながらも、延長二八九里余に及ぶ対州測量を終えることができたが、一方藩の払った協力も決して軽いものでは無かった。提供した人夫三一、一〇〇人、船二、二五〇艘、馬一、五四〇疋、米一九二石等の記録が残されている。ちなみに、縄引き人夫は一日三足のわらじを必要としたとある。

最後に、「測量御用記録」について簡単にふれて置きたい。記録の巻番は、郡佐役中村郷左衛門が測量隊の到着前に、藩命によって彦州に向いて測量隊と行った打合せに関する日記である。二番は欠落。三番はこの一連の記録類の中心部分で、東西両隊の日記風の測量記録であり、併せて宇久島までの船送りの記録が収められている。四番は測量隊に差し出した諸調書等の控である。五番は「惣人夫飯米賃銀その他諸色請払」についての記録である。なお、欠落している二番は、中村佐役の彦州から帰国後測量隊到着迄の十日間の記録で、藩庁への復命と受入準備に係るものとみられるが散逸のためその内容を確認することはできない。以上紙数の関係で概略のみを述べたに過ぎないが、右に挙げた人夫数の外に、実際には更に約二万六百人の動員人夫（日程の変更に伴う動員人夫の捨り分）不用となった人員）があったが、前記の人夫数には加えられていないことを、併せ附記して参考としたい。

対馬の「嫁入婚」小史

永 留 久 恵

対馬の嫁入婚を考えると、北部と中・南部とで異なる儀礼のあることが気になって、歴史的位置付けに多少の迷いとためらいがあったが、最近江守五夫教授（千葉大学）より「日本の（嫁入婚）の歴史的位置」と題された論文を戴いて、眼の鱗が落ちたというのか、かなり周辺が見えるようになり、気の変らぬうちにと小稿を起したしだいである。

近年、結婚式と称する儀礼が執り行われ、盛大な披露宴が催されるが以前は「けっこん」という用語はな

く、通常「嫁入り」と称し、婿養子の場合に限り「婿入り」があった。昔は嫁入りが至って簡素だったのはこの儀礼がそれほど重要な意義を持っていなかったからで、通常の村内婚における嫁の所持品は「風呂敷包み一つ」といわれたくらい身軽であった。嫁入りした娘の親に「喜びをいうと、「さあ、どげえなるますか。まあ、やってみちりますか」というぐらゐの加減で、いわゆる試験婚の観念が多分にあった。それが妊娠して腹帯を締めるよう

になったとき、「かねごと」と称する儀礼があり、上県方面（北部）ではこの時盛大な祝宴が婚家において催された。昔は嫁の齒に鉄漿を染め、法者に頼んで安産の祈禱をしたもので「鉄漿祈禱」に相違なく、一名「腹祭り」とも称された。

齒を染めるということは既婚者のしるしであるが、それがこの日に行われ、祝宴を張った本来の意義は、その婚姻が、この時成就したことを披露したものと解される。これが婚家で行われるということは、いわゆる試験婚の期間から正式に嫁として認知されたことを示している。

臨月になると妻は実家に帰り、そこで出産するのはどこも同じだが、「名付け」の前後が北部と中・南部の最も異なるところである。名付の儀礼はどこも妻方で行うが、そのとき北部では夫方より使者が行き、産児を迎えて祝宴が夫方で催されるのに対して中・南部では、名付祝いも妻方で行われる。これが婚姻の成功を祝う披露宴でもあるわけで、この座の主客は夫方の親族である。

そして産後の肥立ちをみて妻子が婚家に迎えられるが、このときまた祝いがあり、妻方の親族がもてなしを受ける慣わしで、これが北部の方

にはないのである。鉄漿祈禱と名付祝を夫方とする北部と、鉄漿祈禱がなく、名付祝を妻方とする中部以南の違いは、前者が嫁入婚の進んだ形であるのに対して、後者にはまだ古い婚姻形式の残存が窺われることである。

日本民俗学の通説では、古代の婚姻は「掣取」と「嫁入」の二つの儀礼があり、先ず掣取が成立すると、掣（夫）が嫁（妻）の家に通うことになり、これを「妻問婚」と称し、一定期間を経て妻が夫の家に引移るときが嫁入であった。それが中世以降武家の世になってから、掣取・妻問がしだいに廃れて嫁入が主流になったといわれている。

そこで対馬の場合を考えてみると、本来の掣取という儀礼は全くない。妻問は「よばい」という語で残ってはいいても、それに先行する掣取の儀がないのだから泥棒猫の類であったらしい。

昭和二五・六年の九学会連合対馬共同調査団の民俗学班で来島された大間知篤三教授（婚姻史専門）も、「対馬カテボカライ嫁」と題した論文のなかで、「対馬の多くの村々では初掣入の儀礼は全く知られていない」として、嫁入から三日目、嫁の

初里帰りに掣が同行して初の掣入となる「三ツ目」の儀にふれて、「これは新しく、村外婚の嫁入婚の方式を受け入れてから、行われだしたものとと思われる」とされている。

武家階層は村外婚が多いので、妻問婚が成立し難く、掣取の意義も半減するわけで、嫁入婚が主流となつたとき、掣入も三ツ目で間に合わせることになったのであろうか。ならば、これが村内婚にも一般的となつたのは近世に違いない。

ところが前述の初生児の名付祝を嫁の里で行い、改めて迎えるの儀礼を婚家で行う慣習は、かつての一時的妻問婚の遺習ではないかとみられ、これに対して鉄漿祈禱も名付祝いも婚家で行う慣習は、完全に嫁入婚になりきった形ということになるのでないか。これが現在までの私見であった。

ところが、頭初にあげた江守教授の論文において、対馬と同様に嫁入婚の発達した地方が日本の方々にあり、なお韓国の南辺においてもよく似た類型の婚姻儀礼があることから日本婚姻史という国内だけの枠から出て、周辺諸民族との文化的関係において考察する観点が提起されたことはありがたい。

それによれば、韓国でも古くは、婚姻の当初夫は妻方で暮す「妻方一方居住婚」が一般的で、結婚式は女の家であげられるのが原則であった。妻方で夫婦奉式のあと、妻は夫に伴われて婚家に赴く。そこで嫁側の客をもてなす祝宴があり、それから三日目、嫁は掣と共に実家に帰りこの時舅姑と掣との正式対面の儀が行われるが、この「三ツ目」の儀は中国でも「回門」と称して全土に見られ、新婚最初の里帰りに夫が同伴して歓待を受ける。これらの諸例をつぶさに示したうえで右論文は、

対馬式の婚姻儀礼形式は、韓国南部を経て中国大陸に連なると考えられてもよいのである。

と結ばれている。日本の中央に「目」を置いて、周圍論的に地方を見ることの多い柳田民俗学の方法に従わず、大陸と日本を結ぶ文化の流れの線上で対馬を考へることの多い私にとって、また一つ新しい知見を得た学恩に感謝してこの小稿を終るが、十分な歴史的位置付けができないうちに紙幅が過ぎたことを断っておきたい。